英語科編6

第106号
平成21年10月25日

7　東海林進次郎か？

東海林運三郎　宮城県出身東高師33卒
在職33～36

東海林運三郎については、まったくわかりません。それだけでなく、現在までに何回も発行されている桐陰会の同窓会名簿のどの年度のものを見ても、東海林運三郎という教官名は見当たりません。ただ、よく似た名前として、東海林進次郎という名前があるだけです。ところが、昭和2年度の『東京高等師範学校一覧』の明治33年の卒業生には東海林運三郎の名前が記されており、この英語科の列伝で、たびたび引用している『ある英文教室の100年』の伊村論文でも、東海林運三郎の名前になっています。運三郎が正しいのか進次郎が正しいのか、それとも同一人物が改名したのか、まったくわかりません。ちなみに、英語科以外の他の教科に東海林進次郎という教官はおりません。なお、昭和2年の段階では、東海林運三郎は死亡となっています。今後の調査が必要な教官です。（明治38年、第14回卒業生の担任は、東海林運三郎となっていますので、たぶん、各桐陰会名簿に載せている「進次郎」は間違いの可能性が高いと思われます。）

8　比較宗教学の研究

岸本能武太　岡山県出身同志社18卒
在職34～38　東高師教授

岸本能武太は、明治15年に、新島襄により、受洗し、同志社を卒業すると、滋賀県の彦根中学で英語を教えていましたが、明治23年にハーバード大学に留学し、宗教学を学びました。そして、帰国するとすぐに東京専門学校（早稲田大学）に招かれ、哲学や英語などを教えました。しかし、早稲田の英語専修科が廃止されたため、東京高等師範に移り、英語を教えることとなりました。この間、彼は、幸徳秋水らと、社会主義研究会などを結成しています。

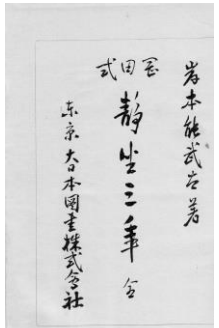
ところで、岸本の中学での授業でのようすについては、滝沢敬一（10回）の思い出話につづられています。それによれば、岸本はずんぐりと肥えていたので、生徒は名前の「のぶた」をもじって「岸本の豚」と渾名をつけていましたが、英語の授業では、アクセントの訓練に熱心で

「一番面白かったのは、後に岡田式静座法の信者となられたアメリカ仕込みの岸本能武太先生、・・・アクセントの必要を論じ、首を強く或いは弱く前後に振り動かして第一次第二次揚音符の稽古をさせられ、・・・往来でも電車中でも練習せよと言われた。」

と述べています。しかし、そのおかげで、滝沢がロンドンに遊んだときでも、発音だけには苦労しなかった、とも述べています。

その後、岸本は中耳炎等の病気のため、附属を辞めて治療に専念し、後に、また、早稲田大等で教えました。東大教授で、自らのがん闘病記を記した『死を見つめる心』などの著書がある岸本英夫（30回）は、能武太の次男です。

岸本能武太著『岡田式静坐三年』大日本図書大4



9　東京外語大第一回卒業生

片山　寛　長野県出身　東京外国語学校3
3卒　在職34～42　東京外大教授

片山寛は、長野県に生まれ、福井や金沢でそれぞれ1年カナダ人の宣教師の通訳をやった後、明治30年に東京外国語学校に入学しました。そして、そこの第1回卒業生になるとともに、附属中学の教官になりました。東京外国語学校の卒業生が、なぜ、附属中学の教官になったかについては、当時の東京高等師範の英語専修科の卒業生の問題があったからです。というのは、当時、東京高等師範には、英語専修科があり、その第1回卒業生が平田禿木であったことは、前号に記しました。そして、第2回生には、石川祐助（作家・石川達三の父）などがいますが、3回生の入学・卒業は3年間ありませんでした。そこで、同志社出身の岸本や東京外国語学校出身の片山などが採用されることになったわけです。

片山の授業は、精確でじみに教えるタイプであったといわれていますが、英文学よりは、英語の名工のような教え方であったといわれています。しかし、彼が東京高等師範に採用されたときは、同年輩の同僚（東海林運三郎のことか？・山口）よりも月給が五円高くて、同僚との付き合いがうまくいかなかったこともあったと、後年、片山は述べています。このようなことがあったためか、その後、東京外国語大学に戻り、そこの教授を長年にわたって勤めました。『英語青年124巻　第2号』昭和53年「片山寛氏追悼」各思い出話

10　コンサイス英和辞書とハンセン病

金澤　久　静岡県出身独学在職34～38

金沢久については、調査不足により、よく分かっていませんが、幕末に生まれ、独学でブランドラムやリデルに英語を習ったことがわかっています。また、日清戦争に従軍したこと、その後、ロンドンに留学したことも分かっています。帰国後、附属中の教官となり、大正11年、神田乃武とともに『神珍コンサイス英和辞典』を編集しました。この辞典は、カナ表記がなく、国際音声学協会制定の発音記号による初めての辞書で、長く愛された三省堂のコンサイス英和辞典になり、現在も使用されているのではないでしょうか。

ところで、先述のリデルという人物は、イギリスからやってきた宣教師で、明治に熊本で初のハンセン病院、回春病院をつくっただけでなく、日本のハンセン病の取り組みに大きな足跡を残した人物です。このリデルの活動に対し、金沢はやはり附属中の英語講師でもあった本田増次郎（本田も一時期、熊本＝第五高等学校教授であった）とともに多大な援助・貢献をしているようです。そして、本田は、動物虐待防止会などにも参加していました。金沢は、附属中教官・東京高等師範教授、学習院教授などを歴任しました。